

滋賀県東近江市君ヶ畑町の一年神主

小椋 悠矢

(木場 貴俊ゼミ)

目次

はじめに
第1章 調査地について
第2章 君ヶ畑の年中行事
第1節 年越し準備と御供盛神事
第2節 春祭り
第3節 秋祭り
第3章 君ヶ畑の一年神主
第1節 日常の役割と決まり事
第2節 行事での役割
第4章 一年神主と行事の変化について
おわりに

はじめに

少子高齢化や自治体の人口減少による担い手の不足を原因とする規模の縮小や、観光資源として活用されるようになったことによる大規模化など、様々な理由で全国各地の年中行事は変化している。本論文で取り上げる滋賀県東近江市君ヶ畑町の年中行事やそれと関係する一年神主の習慣についても例外ではなく、現在までに多くの変容があったと考えられる。それは、一年神主の変容と年中行事の変容双方について調査を行うことで、より正確に捉えられるだろう。

本論文では、現在の君ヶ畑町で行われている年中行事について行ったフィールドワークの結果を報告する。さらに、調査によって明らかになった現在行われている行事の様子と、先行研究に記されている行事の様子や習慣を比較し、どういう構成要素がどのような理由で変化したのかを考察する。

第1章 調査地について

滋賀県東近江市君ヶ畑町は、滋賀県東部の山間部に位置する村落である。東近江市が発足する以前は、神崎郡永源寺町に属していた。君ヶ畑町は、旧永源寺町の中でも最奥部に位置し、近隣には蛭谷や政所など旧永源寺町を構成していた集落がある。

君ヶ畑は林業の集落であり、ろくろなどを用いて木材を盆や椀に加工して生計を立てる木地師発祥の地であるとされている¹。集落内には平安時代の皇族惟喬親王を祭神とする大皇器地祖神社があり、ここが年中行事の中心となっている。現在は一年神主を中心とした集落全体での共同管理となっているが、古くは宮座組織による管理が行われていた。この神社には常駐の神主はおらず、年中行事の際には一年神主に加えて隣接する蛭谷集落から「野神神主」が招かれる。898年の創祀と伝わり、境内内の由緒によれば、惟喬親王がこの地で隠棲していた際に木地の技法を発明し、住民に伝授したことが木地師の始まりであるとされる。このため、現在でも木地師やものづくりを生業とする人が少数ながら参拝に訪れる。

また、木地の技法を伝えた際に小椋谷という地名から、この地の住民に小椋の姓を与えたことが、小椋姓の始まりであると言われている。さらに、大皇器地祖神社の隣には惟喬親王の陵墓があり、君ヶ畑との関係はかなり深い。この皇族との関係および諸国の山に入って7合目より上の木を自由に伐採できることが記された論旨書の写しを根拠にして、君ヶ畑の木地師たちは関所を気にすることなく全国を行き来することができた。正親町天皇や朱雀天皇の論旨書の写しとされるものが君ヶ畑と蛭谷の神社に所蔵されている²。

このようにして全国に散らばった木地師を統括し、初穂料などを徴収するために作成された「氏子狩帳」は、当時の人の流れを知る手掛かりとな

るため、研究価値が高い。一方、蛭谷集落もまた、木地師発祥の地を自称し、氏子駄帳を作成して木地師の統括を図った。そのため本元がどちらであるか、またどちらが多くの氏子（木地師）を抱えるかを巡って争っていたが、両集落の人口や木地師そのものの数が減ったことなどによって争いは下火になった。

第2章 君ヶ畑の年中行事

第1節 年越し準備と御供盛神事

本章では君ヶ畑の年中行事のうち年越し準備と御供盛神事、春祭り、秋祭りについて、それぞれの概要と、筆者が行ったフィールドワークの結果を述べる。

本節では、大皇器地祖神社で行われている御供盛神事と、それに関連する準備について取り上げる。御供盛神事は毎年1月3日に行われる。神事では、蒸した米（御供）を木の椀に入れて固め、円錐状に盛り上げる。神事の名称である「御供盛」はここから来ている。また、鮎ずしをはじめとした神饌を箸と包丁を使って手で直接触れずに切り分けるのも特徴である。

神事中は一年神主と野神神主、氏子総代、自治会長が最上座に座り、神事内での役割を与えられた「若い衆」と呼ばれる氏子11人が上座の中程に座る。神事における若い衆の役割は以下の通りである。

- お神酒注ぎ…名前通り参加者にお神酒を注いで回る。2人で行う。
- マイ…神饌の載ったまな板を各マナのもとまで運ぶ。マナスエとも呼ばれる。本マナ…鮎ずしを切る。
- 上マナ…大根や人参など山の幸を切る。2人で行う。
- 下マナ…カマスやスルメなど海の幸を切る。2人で行う。
- ツメ…御供を木の椀に詰め、円錐状に盛り上げて固める。
- ククリ…ツメが固めた御供に藁を巻き、芯を入れて補強する。2人で行う。

参加者は神事の間、全員無言である。そのため、神主の役目を終えて神事に直接関わることもなくなった年長者が、下座の奥にある土間から声をかけることで神事の進行を補助する。大皇器地祖神社の御供盛神事については、『近畿地方の祭・行事』³や『永源寺町史 通史編』⁴などにおいても調査報告がされており、君ヶ畑を代表する行事として位置付けられている。

以下は、筆者が調査した2024年から2025年にかけて行われた御供盛神事とそれに関連する準備についての行程である。

調査日及び調査項目は以下のとおりである。

2024年12月15日	注連縄および「かいしき」の作成、一年神主の引き継ぎ
2025年1月1日	かがり火、一年神主の月詣り
2025年1月2日	役員による御供盛神事前日準備
2025年1月3日	当日準備、御供盛神事本番

① 2024年12月15日



写真1 かいしき（撮影 筆者）

午前9時より、年末年始の行事に向けた準備が始まった。行事に関わる12名が大皇器地祖神社の社務所に集まり、作業に臨んだ。作業前には、参加者にお神酒が振る舞われた。

まずは、社務所に運び込まれた藁を使って注連縄を作る。作り方は3束の藁を握り合わせるもので、用途によって1束当たりの本数が異なる。各家庭に飾る小さなものは1束5本、社務所と一年神主を務める人物の玄関に飾る中型のものは1束7本、本殿に飾る大型のものは1束10本の藁を

滋賀県東近江市君ヶ畑町の一年神主

使用する。このとき、注連縄の他に御供盛神事のククリで使用するための藁が9束取り分けられた。

さらに、注連縄の作成と並行して、鉋で削った木を使用した「かいしき」の作成も行われた。かいしきとは、御供盛神事で切り分けられた神饌を入れる器で、鉋で削った木を円状にして十字にした藁で固定する。

また、それらを作成している横で、一年神主の引き継ぎが行われた。今年度、そして次年度の神主とも複数回の神主経験があったため、業務内容の確認と今回は変更がないこと、神主装束を受け渡すタイミングなどが口頭でごく簡単に引き継がれた。引き継ぎに要した時間は15分ほどであった。一年神主の引き継ぎを含めた作業は12時まで続き、必要数の注連縄とかいしきが作成されたことで解散となった。

② 12月31日

社務所で行う年越し準備の他に、各家庭での年越し準備も行われた。筆者の祖父母宅では、午前11時頃に神棚に供え物が置かれた。内容は、餅2つとみかんを重ねた鏡餅、干し柿、昆布とお神酒であった。これらの供え物が5か所の神棚に置かれた。

13時からは社務所に集まって年越しと御供盛行事に向けた準備作業が行われた。最初に、軽トラックで運び込まれた松の枝が床の間に飾られた。氏子総代によれば、現在は業者から購入しているが、数十年前は氏子ら自身で枝を切って用意していたという。松が飾られるのと並行してプロワーを使った参道の清掃が行われた。10分程で清掃が終わると神社前にある集会所から提灯、素襖、幟が運び出され、境内の蔵からは高張が運び出された。それから30分ほどかけて、提灯の準備や素襖の状態確認が行われた。

その後、境内にある御幣と七五三の藁を新しいものに付け替える作業が行われた。御神木や鳥居など、複数個所で交換を行ったため、全ての交換には30分程の時間を要した。14時30分に小休憩がとられ、14時45分からは15日に作成した注連縄に御幣を挟む作業が行われた。また、かいしきを大きさや用途別に分けて藁でまとめる作業も行われた。これらの作業には1時間ほどかかった。

16時には片付けが始まり、16時30分には解散となった。

③ 2025年1月1日

1月1日5時30分から境内の提灯に灯が入れられ、かがり火が焚かれた。かがり火では昨年の注連縄やお札、七五三の藁などが燃やされた。時折境内の杉の葉や薪が足され、かがり火が維持された。6時になると一年神主が神社に訪れた。

一年神主は、社務所で装束に着替え祝詞を準備した後、6時15分には烏帽子を被り笏を持った正装で本殿に参拝した。この時、一年神主の他に補助役が1人本殿へ上った。一年神主は本殿と小宮にお神酒と餅を供えた後、祝詞をあげた。補助役は、お神酒と餅を本殿に運ぶ、本殿への階段を上り下りする際に一年神主の足元を照らすなどの補助を行った。7時10分にはかがり火が消され、元旦の行事は終了となった。

また、10時から12時ごろにかけて氏子が社務所を訪れて新年のあいさつをするとともにお神酒を飲み、一年神主からお札を受け取った。一年神主は氏子からのあいさつを受けるとあいさつを返し、お札を手渡した。

④ 1月2日

この日は、翌日の御供盛神事に向けて役員のみで前日準備が行われた。12時45分に5人の役員が社務所に集合した。まず御供盛神事で蒸す米をボウルにあげて水洗いした。その後は御供盛神事で使うまな板や盆などを水洗いした。洗浄には社務所内の水道だけでなく、境内にあるホースや手水舎の水なども利用された。これらの作業には45分程度の時間を要した。

13時30分にはコンロの着火確認が行われた。自治会長の話では、社務所のコンロは一年の中でほとんど使わないので、問題なく動くかどうかをしっかりと確認しておかなければならないそうだ。その後、翌日御供にする米を水に浸けた。着火確認と並行して神事で使う包丁の刃部分を紙で包む作業と切った神饌を包む半紙の用意が行われた。30分ほどでこれらの作業が終わり、14時には休憩がとられた。

14時20分から作業が再開し、御供盛準備で使

う筵の枝毛をとる作業（「ひげそり」と呼ばれる）が行われた。30分ほど鋏を使って表裏両面から枝毛をとり、15時ごろに作業が終了、解散となった。

⑤ 1月3日

1月3日には御供盛神事が行われた。御供や神饌を用意するために、役員のみが早朝5時30分に社務所に集合した。集合してすぐに釜に水を入れ、火にかけた。水が沸騰するまでの間に、神事中に使う箸の組み合わせが分かるように印をつける作業が行われた。なお、例年は柳箸が使用されているが、2025年の場合は、柳の準備が間に合わなかったため竹の箸が使用された。

1時間ほど経過して水が沸騰したため、6時40分から米を蒸し始めた。ここから40分米を蒸し続けた。7時20分に一度火を止めて米の状態を確認した後かき混ぜ、釜の水を補充した。そこから再び40分間米を蒸した。蒸している間に、昨年の絵馬を燃やす、鮎ずしを冷凍庫から出して自然解凍をはじめ、他の神饌を用意する、神饌を載せる三方や神事で使う座布団、かいしきを用意するなどの作業が行われた。神饌として海の幸には鱈節、カマス、スルメ、昆布が、山の幸には大豆、牛蒡、大根が用意された。

8時5分には米を蒸し終わった。釜のふたを開けて5分ほど冷ました後、米をタライに移してしゃもじでほぐした。ほぐし終えた米を冷ましている間に、この後の作業で使用する筵が広げられた。8時10分から蒸しあがった米を筵の上で転がして固める「ぼいぼい」という作業が行われた。



写真2 ぼいぼいを行う様子（撮影筆者）

2人で声をかけ合いながら筵を上下に動かし、数回に一回柄杓を使って水をかけながら作業が進行した。ぼいぼいの作業は、その場にいた全員で交代しながら10分ほど行われた。

8時20分頃、ある程度形が整った米は再びタライに戻された。ぼいぼいの作業もまた手で御供に直接接触することなく行われ、最後の筵からタライに御供を戻す段階でも筵の傾きと反動を利用して御供を移動させた。その後は筵を片付けたり饌米と塩、榊を用意したりといった作業が1時間ほど続けられ、9時15分には装束に着替えるため一時解散となった。

9時50分頃には役員が再集合し、10時までには一般の参加者や野神神主も社務所に集まった。10分ほどあいさつや近況報告をかわした後、10時10分頃からは神事で使用する榊の選定を野神神主が行った。それと並行して参加者が素襖に着替え烏帽子を被った。参加者が着替え終わると、氏子総代が参加者に役割の変更及び追加を告げた。

2024年度は、神事当日になって参加予定者の体調不良が相次ぎ、神主2人を含めて7人で神事を執り行うという異例の事態となった。そのため、本来2で行う役割であるお神酒注ぎは1人で、その上マイとツメ、ククリを兼任し、上マナと下マナが各1人、自治会長が本マナを務めた。

10時57分にはすべての準備が整い、参加者が手水舎で身を清めた後上座にいる2人の神主に一礼をしてそれぞれの配置についた。配置は、最上座に2人の神主と氏子総代の3人が座り、その下に自治会長と下マナ、そこに向かい合う形で上マナとお神酒注ぎが座るといった形であった。

11時3分、御供盛神事が始まった。最初に野神神主が君ヶ畑の御供盛神事を執り行うことを宣言すると、お神酒注ぎが最上座にいる2人の神主と氏子総代、自治会長に初献を注ぎ、他の参加者にも上座から順に初献を注いで回った。この際お神酒注ぎ役はお神酒と杯の載った盆を、肩の高さまで捧げ持ちながら移動する。これは御供盛神事に限らず、春祭りや秋祭りの宵宮でのお神酒注ぎや、御供盛神事で切られた神饌が載った盆を運ぶ際も同様に、盆を肩の高さまで捧げ持って移動する。参加者全員に初献が回ると、再び最上座の神主に2献目を注ぎ、最終的に参加者全員がお神酒

を2献口にした。10分ほどでお神酒注ぎが杯とお神酒の入ったやかんを回収し定位位置に戻ると、マイが包丁と御供を中央に運んだ。

11時15分には続けて鮎ずしの載ったまな板を本マナの前に置いた。まな板が前に置かれると本マナは袖が神饌にかからないよう襷で留めてから切り分け始めた。そのすぐ後に上マナ、下マナの前にも神饌が載ったまな板が置かれ、同じように襷で袖を留めて神饌を切り始めた。神饌はいずれも、横に3等分された後中央部分を縦に3等分され、さらにその中央部分を細かく刻まれた。刻まれた神饌は一部が盆に載せられ、残りは紙に包んでかいしきに置かれた。

本マナ、上マナ、下マナが神饌を切り始めて少しするとツメが中央に出て、木の椀に御供を詰め始めた。2分ほどで椀に御供を詰め切ると、椀をひっくり返して御供を円錐状に整えた。盛られた御供にククリが藁を3束巻いて形が崩れないよう固定した。また、藁を巻き終わった御供の中心に芯を入れてさらに補強を行った。このようにツメとククリによって椀に詰められ、藁と芯で補強された御供が3組作られた。作業はすべて同じ椀を使って行われた。御供を固める作業は10分ほどで終わった。

並行して上マナ、下マナ、本マナは神饌を切り続け、30分程度で全ての神饌を切り終えた。かいしきは1つにまとめられ、御供と神饌が3組作られた。まな板と余りの神饌が中央から下がると、マイによって3組の御供と神饌が野神神主の前に運ばれ、確かめられた。御供と神饌に問題がないことが確認されると、本マナ、上マナ、下マナは襷を解き、マイが神饌の載った盆を下げた。盆が下がるとお神酒注ぎが再度参加者全員に3献目のお神酒を注いで回った。

全員がお神酒を口にすると野神神主からのあいさつがあり、12時ちょうどに御供盛神事が終了した。その後、野神神主から1時間後に祭りを再開する旨が参加者に伝えられ、休憩に入った。休憩中には拝殿に玉串が用意されたほか、参加者たちが昼食をとり装束を直した。

13時になると、社務所にて再度祭りが始まることを宣言された。それを受けた参加者は外に出て、手水舎で身を浄めてから拝殿へ向かった。野

神神主と一年神主が拝殿に上り、野神神主が神事の開始を宣言した後祝詞をあげた。最初の祝詞が終わると2人の神主は本殿に登り、扉を開帳した。その後先ほどの御供盛神事で用意された御供と神饌が本殿とその両脇にある小宮に供えられた。神饌が供えられると野神神主が祝詞を奏上した。祝詞奏上後に2人の神主と自治会長、氏子総代によって玉串が奉納された。その後は撤饌作業が行われ、野神神主によって本殿の扉が閉じられた。

13時25分には拝殿に下りた野神神主が神事の終了を宣言し、参加者が社務所へと戻った。社務所に入った参加者は再び御供盛神事と同じ配置に座り、お神酒注ぎがお神酒を注いで回った。また、参加者たちは御供と切り分けられた神饌も口にしていた。このときどちらもごく少量を口にするだけであったが、祖父の話では数十年前には御供を茶碗一杯分食していたという。13時44分に野神神主によって行事全体の終了が宣言された。

小休憩をとった後、14時から片付け作業が始まった。片付け作業では拝殿や境内の高張にかけられた提灯が外され、集会所にしまわれた。高張は境内の蔵に戻された。また残った御供と鮎ずし以外の神饌が、“動物への施し”として境内と神社近辺に撒かれた。その他神事で着用された素褌が畳んで集会所に片付けられたり、椀や盆が洗われたりした。残った鮎ずしは切り分けられて希望する参加者が持ち帰り、またはその場で食した。14時30分頃にはほとんどの片づけが終了し、最後に神饌として納められた大きな餅が切り分けられ、参加者に配られた。餅を受け取った参加者は帰宅し、14時40分には全行程が終了、解散した。

第2節 春祭り

本節では大皇器地祖神社で行われている春祭りについて、神事の概略や先行研究で明らかにされていることを述べた後、筆者が行った調査に基づいて各行程の詳細を述べる。

春祭りは今年一年間の豊穰を願う祭りで、君ヶ畑で行われる行事の中で唯一巫女が来て湯神楽を舞うのが特徴である。先行研究内では春の例祭として存在していることが記述されている⁵のみであり、詳細な内容は明らかにされていない。

以下は、筆者が調査した2025年度に行われた

御供盛神事とそれに関連する準備についての行程である。調査日と調査項目は以下の通りである。

2025年4月26日 春祭り前日準備、宵宮

2025年4月27日 春祭り本番

① 2025年4月26日

13時に社務所に集合し、その日行う作業の説明が5分ほど行われた。説明が終わると、まずは境内と社務所の掃除が行われた。参道の落ち葉がブロワーで飛ばされ、社務所には掃除機がかけられた。また、掃除と並行して釜支えが作られた。境内にある舞殿に3本の杭が角度や深さを調整しながら打ちこまれ、実際に釜をかけてみて問題なく支えることができるか確認された。この他にも、境内と参道各所に提灯が立てられた。これらの作業は40分ほど行われ、13時50分には社務所で小休憩がとられた。

14時から作業が再開され、神社の入り口に幟が揚げられた。幟はここ数年で新調されたもので、揚げ降ろしに慣れていないためか作業にはやや時間がかかった。14時45分には準備が終了し解散となった。

18時30分に宵宮のため着物に着替えた状態で社務所に再集合した。このとき一年神主は、装束の他に笄と烏帽子を着用した正装の状態であった。全員が集まると、まず提灯と灯籠に火を入れた。提灯には火をつけた蠟燭を入れたが、灯籠には電池式のライトを入れた。使用可能な電池の選定とライトの点灯確認作業に時間がかかり、すべての提灯と灯籠に火を入れ終わって社務所に戻ったのは19時12分であった。

その後若い衆の中で最年少の者がお神酒注ぎ役となり、参加者にお神酒と饌米が回った。お神酒はやかんに入ったものが盃に注がれ、饌米は榊の葉で掬って参加者の手に移された。全員がお神酒と饌米を口にすると宵宮が終了し、19時20分に解散となった。

② 4月27日

10時に役員が社務所に集合し、当日準備を行った。社務所内に掃除機をかけた後、外に出て本殿と拝殿の間に板を渡した。この作業を「橋をかける」といい、渡される板は普段拝殿の下にしまわ

れている。脚立を板の下に入れて支えるなどして、20分ほどの時間をかけて橋をかける作業が行われた。この他に拝殿とその周辺の掃き掃除や、拝殿に登る時に履きスリッパの用意なども行われた。11時10分には湯神楽用の釜に水が入れた。11時30分に野神神主が到着した。しばらく近況報告を行った後、12時10分から神事の準備が始まった。野神神主は装束への着替えをした後、玉串の選定を行い、役員はその間に神饌の状態を確認して三方に入れた。神饌はお神酒と饌米の他、昆布、鯛、スルメ、塩、人參、大根、牛蒡、シメジが用意された。

12時15分には釜支えの下に火がつけられた。しかし、釜をかける前に火をつけてしまったため、このまま釜をかけるか一度火を消すかの相談が行われた。結局12時20分に釜支えの下に火が付いたままの状態釜がかけられた。少し水を足した後、釜にはふたがされた。

12時30分には参加者全員が着物を着た状態で社務所に集合した。12時45分に湯神楽で使用するための榊、饌米、お神酒が載せられた三方が舞殿へ運ばれた。12時55分になると参加者が社務所を出て、手水舎で身を清めた後拝殿へ向かった。

12時58分には野神神主と一年神主、巫女、氏子総代など計6人が拝殿へ上った。野神神主が開始の祝詞をあげた後、大幣を参加者の頭上で振りお祓いを行った。13時5分に2人の神主が本殿へ上り大戸を開いた。その後神饌を社務所から本殿に運び、神前に奉じた。また、このタイミングでラジカセで雅楽を流し始めた。その後野神神主が祝詞を奏上した。祝詞が終わると2人の神主が本殿から拝殿に下りた。

13時19分に神楽鈴を持った巫女が拝殿中央に出て、鈴を鳴らしながら神楽を舞った。神楽が終わると拝殿の前にある舞殿まで移動し、幣で釜の上方を祓った後釜のふたを開けた。その後釜の近くに置かれた三方から饌米をとり、三度に分けて釜の中に入れた。次に鈴と幣を持って神楽を舞った。舞い終わると紐で袖口を留め、お神酒を釜に入れた。その後幣で湯をかき混ぜ、一部を周囲に撒いた。次に榊を両手に持って釜に入れ、湯を周囲に撒きながら再び神楽を舞った。舞い終わると榊を釜に入れ、再び鈴を手にとって神楽を舞った。

滋賀県東近江市君ヶ畑町の一年神主

13時30分に湯神楽の全行程が終わると鈴を三方に乗せ、それを持って周囲に一礼した後拝殿へ戻った。三方は拝殿の隅に置かれた。その後玉串の奉納が行われた。

春祭りの行程は従来ではここまでだが、2025年度は氏子の孫で6歳になる子どもがいたため、続けて勧学祭が行われた。勧学祭では子どもを拝殿に座らせ、神主がその頭上で御幣を振った後祝詞をあげた。祝詞が終わると子どもの名前を呼び、子どもが答えると「しっかり勉強するんだよ」と声をかけた。その後子どもは拝殿から下り勧学祭が終了した。

勧学祭終了後は撤饌と閉扉が行われ、13時50分には参加者全員が社務所に戻った。そして参加者にお神酒と饌米が回り、14時に春祭りの行程が終了した。

14時10分には春祭りに引き続いて、次年度の一年神主を決めるためのくじ引きが、拝殿にて野神神主立会いの下で行われた。10人の候補者があらかじめ決められた順番通りに箱から棒を引いた。当たりの印のついた棒を引いた候補者が次年の一年神主を務めることが決まった。次年の神主が決まったことで14時18分にくじ引きは終了した。

そのまま14時20分から祭りの後片付けが始まった。後片付けでは提灯を下ろして集会所に、高張を境内にある蔵にそれぞれ戻した。また、灯籠内に入れたままになっていたライトを回収し、中の電池を抜く作業や橋を解体する作業や幟を下ろす作業が行われた。片付けには1時間30分ほどかかり、16時にはすべての作業が完了し解散となった。

第3節 秋祭り

本節では、大皇器地祖神社における秋祭りについて、神事の概略や先行研究で明らかにされていることを述べた後、筆者が行った調査に基づいて各行程の詳細を述べる。

秋祭りは豊穰を感謝する目的で行われ、かつては秋祭りでも御供盛神事が行われていたが、現在では簡略化された形での神事となっている。実施する日も9月9日と決められていたが、現在ではそこに近い土曜日を前日準備と宵宮、日曜日を秋祭りとしている。

以下は、筆者が調査した2025年度の御供盛神事とそれに関連する準備についての行程である。調査日と調査項目は以下の通りである。

2025年9月13日 秋祭り前日準備、宵宮

2025年9月14日 秋祭り本番

① 2025年9月13日

13時から前日準備が始まった。集合時間は13時とされていたが、役員は15分ほど早く集まり、12時50分には準備作業を開始した。まずは提灯を集会所から出して社務所に運び、高張を境内内の蔵から出して定位置に立てた。集合した参加者は順次この作業に参加した。13時15分頃に雨が降り始めたため、提灯に雨除けのナイロンカバーをかけた。雨の様子を見るため、13時20分に小休憩がとられた。雨が降り続ける予報だったため一度提灯を下ろすことが決まった。また、幟は揚げないこととなった。これについては、もともと秋祭り際には幟は揚げないという声もあった。

小雨が降る中で13時30分から作業が再開された。前述のとおり提灯が下ろされた他、神事で使用するために境内に生えている榊の枝が切られた。13時45分には灯籠内にライトが入れられた。14時には作業が完了し、一時解散となった。

18時30分に宵宮のため、着物に着替えた状態で社務所に再集合した。一年神主は烏帽子と笏を持ち正装していた。準備段階では提灯が下ろされていたが、宵宮の間だけつけることとなった。15分ほど提灯をつける作業があった後、18時55分から宵宮が始まった。まず、参加者全員が手水舎で身を清め拝殿へ向かった。一年神主のみが本殿へ上がり祝詞をあげた。祝詞が終わると本殿、東の小宮、西の小宮の順でお神酒を奉納した。小宮に奉納する順番は人によって異なるそうで、今年度と同じく東、西の順に奉納したという人と逆の順番で奉納したという人がいた。

19時15分には参加者が社務所に戻り、若い衆の中で最年少の者がお神酒注ぎ役として、上座から順にお神酒と饌米を回した。

19時30分に宵宮が終了し、解散となった。提灯は宵宮終了後に回収される予定だったが、雨が治まったため回収されなかった。

② 9月14日

9時に直前準備のため役員が社務所に集合した。神饌が届くまでの間に社務所の掃除を行った。

9時20分には役員1人が軽トラックで神饌を社務所に運び込んだ。神饌はお神酒、餅、スルメ、鯛、大根、茄子、人参、シメジ、リンゴ、ナシ、栗饅頭など菓子類、塩であった。15分ほどかけてこれらの神饌が三方に移された。9時40分に野神神主が到着した。野神神主は玉串の選定や神饌の確認をした後、10分ほどの間役員と雑談をかわした。9時55分には野神神主が正装に着替え、役員は拝殿に椅子とスリッパ、玉串台を用意し、本殿との間に橋をかけた。また、9時50分から10時にかけて一般参加者も社務所に集合した。

10時45分には一年神主が装束に着替え、10時50分から神事が開始された。本来の開始予定は11時だったが、準備が早く済んだことと野神神主がこの後別の地域で祭を行う必要があったことから、10分前倒しで神事が始まった。まずは参加者全員が手水舎で身を清め、拝殿に向かった。2人の神主と氏子総代、自治会長が拝殿に登り、野神神主が神事の開始を宣言した後祝詞をあげた。その後2人の神主が本殿に登り、野神神主が大戸を開いた後神饌を社務所から運び、奉納した。11時13分には神饌を運び終え、野神神主が祝詞を奏上した。11時20分には2人の神主が拝殿に下り、玉串奉納が行われた。その後撤饌作業が行われ、本殿が閉扉された。11時30分には野上神主が神事の終了を宣言した。

その後参加者は社務所に戻り、お神酒と饌米を口にしました。また、参詣した人物にもお神酒と饌米が振る舞われた。11時45分から片付け作業が開始された。片付け作業では提灯が集会所に、高張が境内の蔵にそれぞれ戻された。また、拝殿の椅子や玉串台が社務所に戻された。12時15分にはすべての片付けが完了し解散となった。

第3章 君ヶ畑の一年神主

第1節 日常の役割と決まり事

本章では君ヶ畑の一年神主について、日常の役割と行事での役割を述べる。

本節では大皇器地祖神社の一年神主が行う仕事

のうち、行事と関わりのないものと一年神主を務める際の決まり事について、父や祖父からの聞き取りを基に述べる。祖父は1940年生まれの85歳で、君ヶ畑町で生まれ育った。所有している山の木を使用した製材や炭焼き等の山仕事で生計を立てており、君ヶ畑から出たことはない。若い衆、一年神主ともに経験がある。父は1970年生まれの55歳で、就職を機に君ヶ畑外に居を移した。盆と年末年始には君ヶ畑に里帰りし、大皇器地祖神社の行事にも参加している。一年神主の経験が複数回ある。

一年神主は、各家の長男が年齢の高い順に務める。ただし、長男が他地域に婿入りするなどして家から完全に出た場合は、次男以下の男子が務める。一年神主を務めることは大変名誉なこととされ、若い衆から上若い衆を経て一年神主を務めることで、共同体の構成員として一人前になるとする考え方もあった。家から一年神主を務める人物が出た場合は、親族総出で神主の仕事を助けたという。しかし、生活差が大きかった5、60年ほど前は貧しい家庭が一年神主を断る場合もあったそうだ。

一年神主を務める期間は、12月16日から翌年の12月15日までの1年間である。毎年12月15日、あるいはそこに近い土日に引き継ぎが行われる。引き継がれる物は、袴、烏帽子、笄の神主装束一式と祝詞、本殿の鍵である。この他に一年神主の仕事内容や行事中の作法、一年神主を務める上での制約などが引き継がれる。次年度に一年神主を務めるのが経験者であっても、仕事内容が変更されている場合があるため、引き継ぎが行われる。

行事と関わりのない普段の仕事として、宮の管理と月詣りがある。宮の管理は、境内及び社務所の清掃を指す。大皇器地祖神社には常駐の神主がいなため、定期的な清掃が必要になる。清掃に関して特に日付の指定などはなく、毎月末あるいは月初めなど各年の一年神主が自分でタイミングを決めて月に一度程度清掃を行っている。清掃と言っても、社務所内に掃除機をかける程度であり、あまり時間をかけない。ただし、秋から冬にかけての落ち葉が多くなる時期には参道の落ち葉を取り除いたり、拝殿の落ち葉を落としたりする。かつては、一年神主を務める者の親戚一同が社務内

全体の清掃を行っていたようだ。現在では一年神主による清掃の他に、行事の前に参加者全員で神社内の清掃を行っている。

月詣りでは、毎月1日と15日の早朝に神社に参拝する。時間の指定はないが、神主を除いたその日一番早く参拝する人よりも前に参拝する必要がある。また、月詣りをしに神社へ向かう道中では他の住民に会っても会話を交わしてはならないとされている。現在は午前5時前後に月詣りを行う例が多いようだ。

月詣りは袴の神主装束を着用した状態で行うが、1月1日を除いて烏帽子と笏は持たない。月詣りの際は、まず社務所に入って神饌であるお神酒、饌米、塩を3組用意する。3組はそれぞれ本殿と東西の小宮の分である。神饌の用意ができれば、手水舎で身を清めてから本殿へ向かう。大戸を開いて本殿に神饌を供えた後、東西の小宮にも神饌を供え、本殿に戻って半月間の感謝を伝える祝詞をあげる。祝詞が終わると本殿の戸を閉め社務所に戻る。これらの行程は30分ほどで終わる。1月1日の月詣りのみ烏帽子と笏を着用した正装で本殿に登り、1年間の安寧を祈願する、普段の月詣りとは異なる祝詞を上げる。また、1月1日のみ補助役と一緒に本殿に登り神饌を運ぶ、足元を照らすなどの補助を行う。神饌も普段のものに加えて餅を供える。

一年神主を務めるにあたっていくつかの条件と決まり事がある。最も重要なことは、穢れを持っていないことだ。身内に不幸があった場合は一定期間穢れを持っているとされ、神社の鳥居より奥に入ることができない。そのため、一年神主を務める者（神主を務める予定の者も含む）に身内の不幸があった場合は、前年に一年神主を務めた者が喪が明けるまでの間の代理となる。

また、神主の装束・道具のうち袴と祝詞は、一年神主を務める者の家で保管し、笏と烏帽子は社務所で箱に入れて保管される。その他、神主を務めている間の制約として、鳥獣類の肉を食すことができない。

第2節 行事での役割

本節では一年神主が行事の中でどのような役割を担っているかを述べる。

12月15日に引き継ぎが行われてから、一年神主が最初に行う仕事は1月1日早朝の月詣りである。先述のとおり、袴に笏と烏帽子を着けた正装で、補助役を伴って参拝する。その後10時から12時ごろにかけて社務所で待機し、新年のあいさつに来た氏子に対しあいさつを返すとともにお札を手渡す。

1月3日の御供盛神事においては、野神神主とともに神事の進行を見守る。ただし、神事の開始宣言や神饌の見定めなどは野神神主が行う。午後からの神饌奉納では野神神主とともに本殿へ上る。この際も大戸を開く、祝詞をあげるなどの神事はすべて野神神主が行う。

4月の春祭りや9月の秋祭りでも同様に、拝殿に上り行事の進行を見届ける。だが、どちらの祭においても野神神主とともに本殿へ上りはするものの祝詞や大戸開きを行うことはない、あるいは本殿に上ることすらなく氏子総代や自治会長らとともに拝殿上で待機している。また、春祭りおよび秋祭りの宵宮では、最上座に座って最初にお神酒と饌米を受け取るが、祝詞をあげたりはせず目立った活動は行わない。なお、御供盛神事、春祭り、秋祭りとその宵宮の際は袴に烏帽子と笏を持った正装で参加する。1月1日の月詣りを含めても正装して行事に参加するのは年に数回である。

年中行事以外では、君ヶ畑の中で建物が建てられた場合（小屋の建て直しなど）に一年神主が地鎮祭を行う。地鎮祭の際に上げる祝詞も神主装束や他の祝詞と一緒に引き継がれるが、地鎮祭を行う機会はほぼなく、複数回の神主経験がある人でも唱えたことがない場合がほとんどである。

第4章 一年神主と行事の変化について

本章では一年神主に関わる調査を通して明らかになったことと先行研究で調査されている一年神主の習慣や行事の進行を比較し、どの点がどのような理由で変化したのか、あるいは変化していないのかを考察する。まず、過去の一年神主については、菅沼晃次郎『木地屋のふるさと 君ヶ畑の民俗』に記録されている。以下にその記述を引用する。

神主を受けると月に九回、一・三・七・九・十五・十六・二十・二十四・月末の早朝に水または湯で身を浄めてから羽織袴・白足袋・白鼻緒の下駄をはき、扇子を差し、御神酒と饌米を持って神社へゆき、お供へをして祝詞をあげて祈念をする。このとき身を浄める水または湯は、各自の身体の調手によって予め決めておき、任期中それを使うのである。また、この月に九回の朝詣りの前の晩には油を持って神社の灯明をあげに行く。そして、参拝の途中は人にあっても口を決かないし、常でも他家へ行くと上座に坐り、敷き物があれば敷く。また、人々と口論をしないよう慎む。明治三十七年までは一年間、髪も鬚も剃れなかったという。なお、この月に九回の朝詣り以外に神社での祭礼に参加することは言うまでもないし、一度神主をつとめると、途中で半役に落ちて宮の座は残される⁶。

以上の記述と現在の一年神主を比較すると、一年神主を務めるにあたっての制約や仕事内容が、1971年から2025年までのおよそ55年間でかなり緩和されていることがわかる。1971年の時点でも明治時代と比較して、髪や鬚を剃ることができるようになったことなど、制約が緩和されていることが指摘されている。他に緩和されている制約として、月詣りの回数がある。現在は毎月1日と15日の2回のみだが、1971年には9回の月詣りが行われていた。

また、現在は手水舎で身を浄めるが、当時は家を出る前に身を浄めてから神社へ向かっていた。月詣りの際に身を浄めること自体は共通しているものの、浄める方法が簡易になっている。さらに、神社の灯明をあげることも現在は行われていない。

これらの変化の原因としては、一年神主を務める人物が君ヶ畑外で生活している場合が増えたためであると考えられる。君ヶ畑から出て他地域で生活している人物が一年神主になると、月詣りの度に君ヶ畑へ里帰りする必要がある。月に9回の月参りに前の晩の灯明あげを加えて18回の参拝は、君ヶ畑の外に生活拠点を置いている人物にとって大きな負担となる。このため、月詣りの回

数が減らされるとともに灯明をあげる行程が廃止されたと考えられる。

参拝回数以外の部分では、昨年度から月詣りの際に神主装束ではなくスーツでの参拝が可能になった。この変更の背景には一年神主を務める人物の高齢化があると考えられる。引き継ぎの際に聞いた話では、装束へ着替えるのに時間がかかることや、時期によっては下駄をはいて参拝すると非常に足元が悪くなることなどの理由が聞かれた。また、この変更については先述した君ヶ畑外で生活しながら一年神主を務める人物が、月詣りを終えてすぐ仕事場に向かえるようにするための配慮という一面もあると考えられる。

さらに、一年神主の制度自体が大きく変化している。5年前までは各家の長男が年齢順に務めていた。

しかし、5年前に神主を継ぐ人物がいなくなった（全員が神主を経験した）。それに加えて、そもそも神主を務められる人物が減少していることで制度の維持ができなくなっていることから、野神神主立ち会いのもと、くじ引きで担当者を決めるようになった。候補者には君ヶ畑内の組に応じた番号が割り当てられ、一度くじで選ばれた人物は他の候補者が全員神主を務めるまで再び選ばれることはないなどの取り決めが作られた。また、同じタイミングで各行事が一年神主を務める人物とその親族が主導で進行するものから字全体で協力して進行していくものとして扱われるようになった。

次に、『永源寺町史 通史編』に記録されている御供盛神事の様子と令和7年度の御供盛神事を比較し、御供盛神事の変化についても検討する。この記録はおよそ20年前の2006年に編纂されたものだが、2025年に行われた神事と比較すると相違点が数多く見受けられる。

まず、神事の準備を行う時間帯が大きく異なっている。『永源寺町史』の記録では「午前十時ごろ、神主・区長、そして神職らが揃い、道具や進行について確認をする台所では御供に使う米の蒸しも始まる。ホンマナと呼ばれる鮎スシが、俎板の上に乗せられ、まずは社務所の床の間に置かれる。午前十一時、神社参道に集まった着物姿の若い衆は、宮入りし社務所の前に揃った後、合図を待っ

て社務所に入る。(中略)このほか後見役の年長者が付き添い、神饌の調製やホンマナ、つまり鮎スシの切り分けなどを指導する」⁷とあり、10時から米の蒸しをはじめとする準備が始まり、11時に若い衆が宮入することがわかる。また、昼休憩を挟んで再開するのは14時ごろである。これに対して2025年の神事では米の蒸しが始まるのは6時40分頃と、かなり早い時間から始まっている。神事の開始は11時、再開は13時と行事全体のスケジュールが早めに設定されている。神事全体のスケジュールが前倒しになった理由としては、神事に関わる人手が減ったため一つ一つの行程に時間がかかるようになった点が挙げられる。

また、「神主宅では親類が集まり、神饌となる鮎スシ三尾・牛蒡・大根・昆布・大豆・鯛・カマス・鱈節・酒、そして米を蒸して円錐形に形を整えた御供を括る細藁や神饌を乗せる木地の台付盆・カイシキと呼ばれるヘギで作った曲物状の容器、半紙などが準備される」⁸という『永源寺町史』の記述からは、神主を務める人物の親戚一同が総出で準備を行っている様子や若い衆の他にそれを補助する上若い衆が存在し、神事に関わる人数が現在と比べて多いことが読み取れる。

対して2025年の神事に参加したのは神主を含めて7人であり、欠席者が予定通り参加したとしても神主を含めて10人程度と、若い衆が行う仕事に必要な11人にも届いていない。このような状況であるため人手不足を準備時間を早めることでカバーしているのだと考えられる。それに加えて、神事を早く終える原因の1つとして野神神主が別の祭事に参加する必要があるという事情もある。神職自体の減少などで同じ日に複数の神事が重なっている場合は、神事が終わってすぐ移動しなければならないためできるだけ神事の開始、終了時間を早めていると考えられる。

ただし、行事の大まかな流れは変化しておらず、「①初献・二献と神酒が回されしばらくすると、神主の親戚の者が上若い衆頭に向かって無言で合図する。②若い衆は一斉に櫛を掛けて調理にかかる。まず、俎板に乗せられた鮎スシが床の間から恭しく下げられ、ホンマナ役の前に置かれる。役の者は上若い衆頭の指示を受けながら、火箸のような鉄の俎箸と包丁をあやつり、これを礼式に

従って切り分ける。③切り方はまず一尾を頭と身と尾の三つに切り、中央のみの部分を三つに、さらにそれを三つにと切り分け、カイシキと呼ばれる簡易な曲げ物に入れる。シモマナやカミマナは賽の目に切り、同じように白紙に包んでカイシキに入れる。④御供詰めや御供括りの役の者は、蒸し上がった飯(これを蒸し御供という)を木地椀に詰め、それをひっくり返して円錐形にし、これに手早く細藁を巻く。御供は五組作られ、調理中は一切無言である。⑤昼近くに神饌の調理が終わると出来上がった神饌をいったん下げ、三献目が出される」⁹という記述は、現在行われている御供盛神事と同様だ。

変化している箇所として、鮎ずしは一年神主の家で漬けていたが、市販のものを購入するようになったことが挙げられる。これも神主を務める人物が君ヶ畑外で生活している場合や神事に関わる人数が減っていることが原因であると考えられる。

御供についても変化がみられる。2024年及び2025年の御供盛神事で用意されている御供は3組で、本殿と東西の小宮にそれぞれ1組ずつ奉納されているが、2006年の記録では5組の御供が用意されている。祖父の話では、5組用意されていた当時は本殿に3組の御供を奉納していたようだ。また、米を蒸し始める時間は異なっているが神事の終了時刻がほぼ変わらないことから、2006年の神事でツメ、ククリが扱っていた御供は蒸し上がったばかりで熱い状態だった可能性がある。

午後からの神事についても、「午後二時ごろから祭典に移り、神職・神主・役員らが神前に進み、型どおりの神事が始められる。続いて午前中に調製され、木地盆に盛られた神饌が若い衆と役員により手繰りで神前に献じられる。神饌の上げ下げの際、若い衆は神饌を盛った木地盆を片方の肩の高さまで捧げ持つて行く」¹⁰という記述から変化していない。

一方、直会での御供の扱いは変化している。『永源寺町史』には直会において櫛の葉を杓子代わりにして御供を食すことや、かつては東西の座の年長者10人に2膳、神主に1膳など分け方が決まっていたことなどが記録されている。2025年の直会では櫛の葉を杓子代わりに使用している点は共通しているが、食す御供はごく少量であり、参拝

者が2名いたものの神事の参加者のみで食された。これについて参加者の1人は、藁混じりの御供を茶碗1杯食べきるのはしんどかった、と話しており、御供を食す負担を小さくしようとした結果食す量が少なくなったと推察できる。しかし、食す行為自体は続けられている。『永源寺町史』にも「いずれにしても、神に捧げられた神饌を共同体の成員にくまなく分配して、その神徳にあずかろうとする心は、『神人共食』という神饌の本旨に添うものであり、しかもその調製が若い衆や一年神主など、宮座によって厳格に維持されてきたことも注目される」¹¹との記述があり、御供盛神事の根底にある神人共食の理念は現在も受け継がれていると言える。この他、菊水の紋の入った紺の素襖と烏帽子という神事を行う際の衣装や鮎ずしの切り方、神饌の種類など変化をしていない部分が神事の根幹として捉えられ、現代まで続いているのだと考えられる。

過去と現在の御供盛神事を比較すると、変化している点が多く見受けられ、その原因のほとんどが参加者の減少や高齢化に集約される。2025年時点での君ヶ畑町は世帯数14、男女各10名ずつ計20名が在住している¹²。そのうち60歳以上が18名であり、70歳以上が16名、80歳以上が7名である。これに対して永源寺町史の記録がとられた2006年では、世帯数27、男性28名女性30名の計58名が在住していた¹³。約20年の間に人口が3分の1程度まで減少していることがわかる。このことから君ヶ畑の神事は人口減少によって変化を強いられてきたと言えるのではないだろうか。

おわりに

本論文では、君ヶ畑で行われている年中行事及び一年神主の習慣について調査を行った結果を述べ、先行研究に記録されている神事や習慣との比較を行ってきた。その結果、神事の行程が簡素化されていること、一年神主を務めるにあたっての制約が緩和されていることが明らかになった。その原因としては集落全体の人口減少や高齢化が挙げられる。

君ヶ畑の神事や一年神主の慣習は人口減少や高

齢化によって簡素化、縮小している。しかし、その中でも神事を続ける方法を模索し、現在まで神事を継続させている。御供の数や一年神主の制約、神事に参加する氏子の人数などは変化している。しかし、神事そのものや鮎ずしの切り方、神人共食の理念など神事の根底にあるものは変わらず現在まで続いている。調査中にお話を伺った氏子総代は、あと10年は一年神主と君ヶ畑の神事を続けていくことができると語った。君ヶ畑の地を離れても行事に参加する人もいれば、君ヶ畑に留まりながらも行事に参加しない人もいる。君ヶ畑の人々が神事を続ける意思を絶やさない限り大皇器地祖神社の神事は形を変えながらも継続されるだろう。

¹ 菅沼晃次郎『木地屋のふるさと 君ヶ畑の民俗』（富士出版印刷、1971年、10頁）

² 永源寺町史編さん委員会『永源寺町史 木地師編上巻』（東近江市、2006年、399-400頁）

³ 滋賀県、和歌山県教育委員会『近畿地方の祭り・行事』（海路書院、2009年、40-45頁）

⁴ 永源寺町史編さん委員会『永源寺町史 通史編』（東近江市、2006年、1304-1309頁）

⁵ 『木地屋のふるさと』34頁

⁶ 『木地屋のふるさと』10頁

⁷ 『永源寺町史 通史編』1304-1307頁

⁸ 『永源寺町史 通史編』1305頁

⁹ 『永源寺町史 通史編』1304-1307頁

¹⁰ 『永源寺町史 通史編』1307頁

¹¹ 『永源寺町史 通史編』1309頁

¹² 「東近江市の人口統計（2025年11月1日分）」（東近江市ホームページ、2025年12月18日閲覧）

¹³ 「東近江市の人口統計（2006年度11月1日人口世帯）」（東近江市ホームページ、2025年12月19日閲覧）